

*ペシャワール会発足四〇周年によせて

中村先生と歩いた二四年

「命の園」ができるまで

PM S 副院長 / ジャラバード事務所所長
ジアウルラフマン

ハンセン病治療に邁進

私はアブドルラフマンの息子のジアウルラフマンと申します。一九九六年にペシ

ヤワールのJAMS（日本—アフガン医療サービス）の医師として働き始めました。

JAMSは、一九八九年のソ連軍撤退後、ドクターサーブ中村の指導のもと、アフガン東部でナンガラハル州にドラエヌール、クナール州にドラエピーチ、ヌーリスタン州にワマ診療所を開設し、職員が交代制で各診療所に出向き、患者の治療にあたっていました。

私が採用された当時、ドクターサーブ中村はアフガン人、パキスタン人のハンセン

病の診療をスムーズにするために、活動の拠点をミッション病院からPLS（ペシャワール・レプロシー・サービス/現PM Sの前身）に移して二年が経っていました。

ドクターサーブは、JAMS院長のドクターシャワリに、人手不足のためJAMSから医師一名と看護師一名をPLSに派遣するようにと指示していました。ドクターシャワリはJAMSの医師一人ひとりに自ら進んでPLSの病院に行く者はいないかと尋ねましたが、誰一人手を挙げる者はいませんでした。

結局、ドクターシャワリが私にPLS病院に行つて欲しいと要請したので、私はそれに従うことになりました。看護師の故モハマッドアクバルと共にPLSに派遣され、ドクターサーブの指導のもと、ハンセン病棟で働き始めたのです。PLSは二四時間門戸を開放してパキスタン人やアフガニスタン人のハンセン病診療をしていました。

やがてハンセン病患者の多い場所での診療を目的に、パキスタンのドバイルやマストジヤラシュトに診療所を開設し、アフガニスタンの診療所と合わせて、私たちは一カ月交代で勤務し診療を行ないました。ディール郡テメルガル診療所では、アフガニスタンのハンセン病多発地帯から難民となつてくる人たちを待ち受けて診療をしました。

一九九八年、ペシャワールに近代設備を備えたPM S基地病院が建設されました。七〇床あるこの病院ではハンセン病の機能再建

術も多数行ないました。勤務開始の際には職員全員で「我々は、貧しい患者を助けることで、神様に仕えます。国籍や宗教を越え、互いに協力して働きます」と唱和します。そしてドクターサーブ中村と「誰も行かない、誰もしないなら私たちが行って支援しよう」と毎朝の会議で話し合いました。忘れてならないのは、ドクターサーブ中村がこれら全ての診療所と病院で内科診療と外科手術の両方を行なっていたことです。

井戸掘りを始める

二〇〇〇年にドクターサーブ中村と私がアフガニスタン側のPMS診療所を訪ねた時のことです。ダラエヌールに行くとき、世界保健機関(WHO)の公衆衛生会議場で全ての援助組織が参加しなければならぬミーティングが行われており、ドクターサーブと私が出席しました。会議中、公衆衛生担当官がナンガラハル州、特にソルフロッド、ロダット、アチン、チャプラハルで深刻な干ばつが発生しており、人と動物が同じ水源から水を飲んでいて感染症リスクが高いと発言しました。しかし、援助を求められたどの組織も支援を約束出来なかったのです。「支援がなければ、感染症拡大を防ぐためにはクナル河上流地域の住民を移住させるしかない」と担当官は話しました。会議後ドクターサーブ中村は、なぜ住民が住む家を離れなくてはならないのか、と大変気落ちしていました。

ペシャワールに戻った後、ドクターサーブは日本に一時帰国されました。数日後、日本から連絡があり、ナンガラハル州政府高官に同州住民の誰ひとりとして村から避難させないように伝えること、そして私に干ばつ被災地に井戸を掘り始めるように、と指示なきいきました。

二〇〇〇年六月、日本から戻ってこられたドクターサーブと私が現地を視察したところ、状況は大変ひどいものでした。住民は遠いところまで飲料水を汲みに行っていました。そこで私たちはジャララバードに事務所を構え、新たに職員を雇って、ドクターサーブの直接指揮のもと、井戸掘りを開始したのです。一年ほどの間で干ばつ被災地、難民キャンプ、モスクに六〇〇本の井戸を掘りました。これにより住民は村を離れずにすみ、様々な感染症から身を守ることが出来ました。

忘れられた人々に食糧支援

この時期は第一次タリバン政権の頃で、二〇〇一年には国際支援団体は全て撤退し、国内援助組織もほとんど残っていない状況でした。

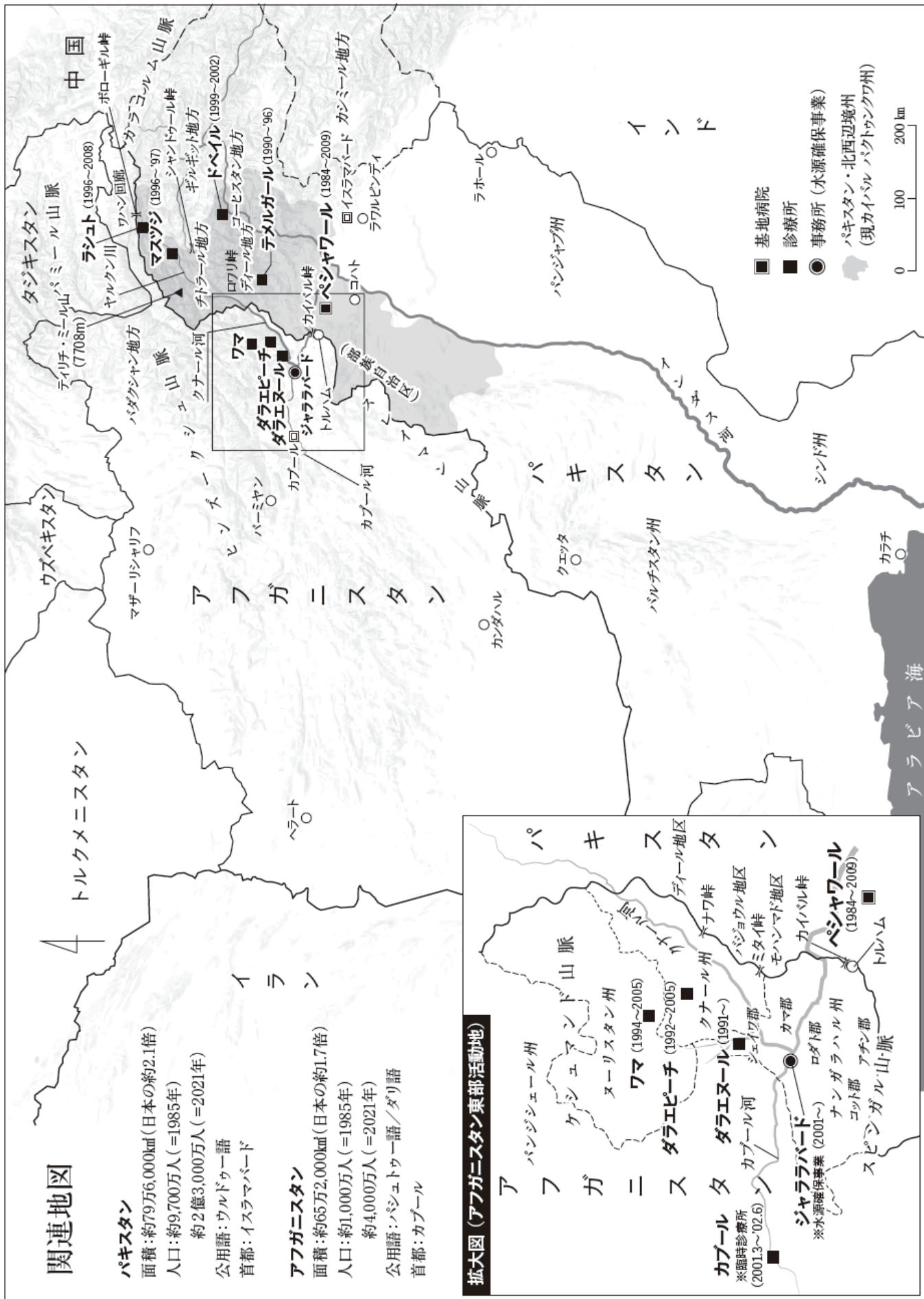
そこで私たちはドクターサーブの指示に従い、カプールに五つの診療所と管理事務所一カ所を開設しました。ドクターサーブは毎月これらの診療所を訪れていました。その後九月十一日にアメリカで同時多発テロ事件が発生し、十月にはアメリカによる



PMS基地病院での朝礼の様子(2001年)

報復の空爆がカプールで開始されましたが、PMSの五つの診療所では継続して空爆で負傷した人や病人の治療にあたりました。これにより何百人ものカプール市民が死を免れたのです。

そんなある日の朝の会議で、地域住民、特に子供や妊婦に栄養失調が広がっているよいうだとの報告がPMS診療所の医師たちから上げられました。ドクターサーブ中村がその理由を尋ねると、アフガニスタンにはタリバンしか住んでいないと思っている外国からの経済制裁による食糧不足が主な原因というのです。外国に逃れることも出来ない二五〇〇万人の貧しい人々がいることを、あらゆる支援団体も国連も忘れてしまっているとの答えでした。



ドクターサーブ中村は自ら診療所に赴いて実態をつぶさに見て回りました。後にはカブールでの調査を主導されました。PMS職員は米軍の空爆が続くカブール市で一軒一軒回って状況を調べていきました。勇敢な彼らが自ら死の危険を恐れず実施した調査の結果をドクターサーブに伝えると、二〇〇キロの小麦粉と調理油十六リットルを五万世帯に直接配布するよう指示されました。実行委員、調査チーム、配給チームが任命され、食糧を調達しました。そしてドクターサーブの指揮のもと、私たちは食料配布を開始したのです。

配給チームは計画通り、カブール市内全域で事前に配った配給票をもった家族に食糧を配布しました。翌日も同地域で配給を実施しました。ナンガラハル州でも米軍空爆の被災地域を調査し、配給票にもとづいて食糧を配りました。これにより配給がなければ確実に死んでいた大勢の子供や妊婦の命が救われました。

灌漑事業・学校建設・命の園

第一次タリバン政権崩壊後に新政府が政権を掌握すると、国際支援団体や地元NGOがカブールで活動を再開しました。カブールで援助組織が急増していくのをPMSの私たちも肌で感じました。

やがてドクターサーブが本来のPMS活動地すなわちアフガン東部に戻った方が良さだろうと判断なさったので、私たちはそ

の指示に従ってカブールを去りました。そして干ばつの続く東部で医療と井戸掘りに専念しました。東部では農業用水のない住民が故郷を捨ててクナル河やカブール河周辺地域や近隣諸国に移り住んでいました。そこでドクターサーブは二〇〇三年に「緑の大地計画」を開始してナンガラハル州からの住民流出を止めると発表しました。

こうして「夏の洪水時には農地を水害から守り、川の水位が下がる冬季には灌漑用水を供給する」とのスローガンのもと計画が進められていきます。

まずシェイワ郡、カマ郡、ベスード郡で取水口、用水路を建設し、二〇一九年十二月四日までにカブール河とクナル河沿いに十カ所の取水口と用水路を建設しました。これにより一万六五〇〇ha（現在は二万三八〇〇ha）の土地で冬季でも農業が可能になりました。

これらの地域では住民は銃の代わりに鋏をもつて農業に動かしむようになり、干ばつでよその土地に移住していた住民の多くが戻って来ました。ドラエヌール地区では揚水ポンプを使っていた農業用井戸が、現在では太陽光発電で稼働しています。さらに三八本のカレーズ（地下水路）がPMSによって復旧されました。

また、シェイワ、ドラエヌールのほかクナル州各地区の住民が地元で学校がないために近隣諸国に移住していましたが、二〇〇六年、地域住民の要請にこたえ、ドク

ターサーブがシェイワ地区にモスクとそれに付随した学校建設に着手、後に寄宿舎も建設されました。「マドラサオブノマニヤ」と名付けられた学校は現在、十四年生（高校）までの生徒に宗教および一般科目を教えており、多数の生徒が卒業しています。

かつて「死の沙漠」と呼ばれていたガンベリ沙漠は開墾不能な土地でしたが、二五km上流のマルワリード堰から取水された水が到達している今では「命の園」となっています。ここでは一七六ジェリブ（約二三〇ha）の土地が開墾され、ドクターサーブ中村の名前を冠した公園が建設されています。庭園を整備し、一〇〇万本を超える果樹や樹木を植えました。各地から多くの人がこのガンベリ公園を訪れて、ピクニックを楽しんでいます。

*

私は二四年間、ドクターサーブ中村とともに歩んできたこと、PMSに二八年間勤めてきたことを誇りに思います。ドクターサーブ中村とともに二四年の間に成したこと、を簡略にまとめました。もっと詳しく語るならば、何冊もの本が書けることでしょう。最後に、ドクターサーブ中村は行動する人であっただけではなく、人類にとつての学校、思想そして哲学そのものであったと思います。

どうかドクターサーブの魂が喜びに満ち、ドクターサーブの記憶がいつまでも人々の心に刻み込まれますように。